

イギリスとアメリカの生活事情

【イギリスとアメリカの食生活実情】

海外留学生活において苦勞する点として食を思い浮かべる人は多いことかと思えます。実際に英米共通で外食の不便さには辟易する人が多いようです。イギリスでもアメリカでも、一番安いタイ料理など比較的安いものでも、ディナーとなると1200円程度、中華やインド料理となると1700~2000円程度になり、週末にワイン一杯程度が付いただけで3000円程度の支出になってしまいます。一方、ランチ事情には多少違いがでてきます。アメリカでは立地にもよりますが大学周辺には屋台が出ており、500円~700円程度で多様な国の料理を楽しむことができます。この点イギリスは場所にもよりますが恵まれておらず、サンドイッチが4ポンド、コーヒーを足して6,7ポンドにもなることもあります。

留学するにあたって学生の大きな助けになるのは学食の存在でしょう。イギリスの学食は基本的に安く、オックスフォード大学では4ポンド程度(味は相応とのこと)。アメリカは大学によって大きく異なり、外食とほぼ同じ水準のところもあれば、とても安いところもあります。住居と紐付けになっている場合もあるので、留学開始前に事前に調べることをお勧めします。

もし留学先の学食が好ましくない場合、自炊がおすすめです。日本人が特に多いアメリカ西海岸でなくとも、スーパーのアジアンコーナーなどで基本的な食材は揃えることができ、東海岸には日本の野菜を販売している農場などもあるため、自炊生活は十分に可能な環境です。山田の体験談によれば、くれぐれもキッチンのない寮に入ることはおすすめはしないとのことでした。

【パーティ】

イギリスではパーティの社会的な位置づけが、日本やアメリカと比較して高く、大学に年に数回の公式なパーティが行われます。このパーティ向けの委員会も発足し、プロのミュージシャンを呼ぶこともあります。ドレスコードはブラックタイ(タキシードかつ蝶ネクタイ)など指定され、チケット代も数万円することもあります。

一方アメリカでは公式な行事としてのパーティは少ないようです。その一方、友人同士でパーティを開くことはとても多ようです。その他、佐藤が所属するスタンフォード大学電子工学科ではハッピーアワーと呼ばれる学科主催のパーティが隔週で行われます。学科単位のパーティであるため、ここでの交流が研究でのコラボレーションに直結することもあります。

日本では、本人以外の友人が主催するのと対照的に、欧米では、誕生会は自分で主催するのが通例のようです。アメリカ・イギリス・ドイツなどでは自分で**勇気をもって**主催する必要があります。最近では、Facebook のイベントページへ招待することが典型例です。地域の Meet up Party などに参加するなどの方法もあります。ホームパーティではその場で食べられるもの、ワインなどを持参することがマナーとなっています。

【スポーツを通して気づいたこと】

アメリカ編

米国人は基本的に家の中でも土足ですが、アジア人の家では玄関で靴を脱ぐところも多く、私の自宅も例外ではありません。シェアハウスの床をゴシゴシ掃除する自分(長野)を見て、ルームメイトがこう言いました。「どうしてこんなに一生懸命掃除をしているのか」

剣道の道場では、足腰を鍛錬するという意味でも、伝統的に練習前後に道場の雑巾がけを行います。長野が小中学生の時に通っていた道場では、練習の途中でも、道場の床が汚くなると、面をつけたまま雑巾がけをさせ

られました。その当時は、「道場は汚れたら掃除するもの」というように頭で理解していましたが、どうやらそれ以上のことが体に染み付いていることに最近気づかされました。素足で木の板の床を擦ると、足の裏の感覚にはとても敏感になり、しばらく同じ場所で剣道を続けていれば、足の裏だけで床が埃っぽいかわかるようになります。小中学校の道場では、最初は師範に「道場が汚れているだろ！」と言われるまで動けません、上級生くらいにもなると、自分から気づいて勝手に雑巾がけを始めるようになったものでした。その当時、床を掃除するのは「ただそういうものだから」というような理解だけでしたが、今では、無意識にこういうところまで訓練されるように仕向けられていたように感じます。というわけで、机は汚いほうがクリエイティブな仕事に向いているらしいので放って置くが、床は常に閾値内に押さえない、と思ったようです。

イギリス編

重本が所属するケンブリッジ大学バドミントン部では、1時間あたりのコート使用料金は日本ほど安くはないものの、気軽にプレイすることができます。日本では器具の片付け、コートの掃除までを自分たちで行い、それを含めて利用時間ですが、英国では体育館(スポーツセンター)の職員が行います。ここにもまた、上記で長野が述べるような両国のスポーツと労働に関する価値観が現れているのではないのでしょうか。日本のスポーツは、武道の精神を受け継いでいる部分も多く、道具や他の選手への接し方、試合場でのマナー等、人格鍛錬の意味合いも色濃くい様に見受けられます。一方で、英国では、選手は最高のパフォーマンスをするのが仕事であり、片付けなどは施設職員の仕事という認識のようです。選手がこういった準備や片付けをしてしまうと、職員の仕事を「奪ってしまう」、という見方をする人もいと耳にした事もあるくらいです。

篠原が所属するケンブリッジ大学バスケットボール部・コーフボール部・アルティメット部(全てチームスポーツ)では、日本のいわゆる「体育会系」のような上下関係は無く、いちプレイヤーとして集まるドライな環境であると感じています。練習中は戦術に関して喧嘩のような議論を交わしますが、一旦練習が終わると何事も無かったかのように和気藹々と接しています。日本と欧米の哲学の違いが感じられます。

大学一般の部活に関する話として、ケンブリッジ大学とオックスフォード大学を除いて他の世界中の大学に類を見ない、カレッジ制度というものが存在し、それが両大学でのスポーツ事情をより面白くしています。ケンブリッジ大学、オックスフォード大学はそれぞれがいくつかのカレッジと呼ばれる学寮から成っており、それら全てが大学機構により統括され、ひとつの大学と見なされています(ハリー・ポッターの寮をイメージして頂ければ幸いです)。各カレッジ、大学機構はそれぞれの部活を持っており、カレッジの部活はそこに所属する学生のみで構成され、大学の部活はカレッジに関係なく、実力のある者が採用されます。したがって、大学選抜チームとカレッジチームには実力の差が有り、オックスブリッジで最大のスポーツであるボート部においては、大学選抜メンバーには国際大会優勝者やオリンピック出場経験者等も含まれています。

グループメンバー: 澤田真行、重本祐樹、篠原肇、前田一輝、佐藤徳之、長野光希、山田倫大

文責: 篠原肇